

「カントと中国哲学」

能 木 敬 次

序.

近年、中国儒教思想の近代ヨーロッパ思想家への影響の痕跡を探ろうとする動きが中国学の研究者やカント研究者の方面よりちらほら見られる。堀池信夫、井川義次、石川文康ら諸氏の著作・論考である。彼らはライプニッツ（1646-1716）・クリスチャン・ヴォルフ（1679-1754）における中国哲学への深い関心と、中国哲学が近代ヨーロッパ思想に与えた影響を正確な資料提示をもとにつまびらかにしようとしている。そしてかれらの研究の究極的な試みとして、中国哲学のカント倫理学への影響の可能性を指摘しようとしている。その視点は哲学史における西洋の独占的な地位に楔を打ち込むものであり、画期的で野心的なものであるが、仮にその実証的な研究が成功すれば、ヨーロッパの哲学界にただならぬ激震が走るであろう。なぜなら、ライプニッツ・ヴォルフにおける中国哲学の影響に関する実証的研究は今や多くの成果を生みつつあるが、カントにおける中国哲学の影響は未だ実証されていないからである。加えて、ヨーロッパの思想界には概して歴史的に中国哲学の影響に対して否定的な空気がある。それは東西のどの哲学史の著述を開いてもはっきり見て取れる。彼らの方としてもヨーロッパ近代哲学の中核的要素である主観主義と自由の理念の起源を中国思想にやすやすと明け渡すわけにはいかないであろう。それに加えてヨーロッパの神学や哲学と中国思想の間の表象形式の違いが、多くのヨーロッパの思想家たちをして四書などに見られる中国思想をヨーロッパと同じ知的地平に立った哲学と見做すことを躊躇させるのであろう。過去、中国思想にまったく言及しない思想家も多くいた

が、カントやヘーゲルのように、言及はしても概して否定的な評価を下しているのがヨーロッパにおける中国思想の扱い方であった。その政治思想に明瞭に中国思想の跡を見てとれるライプニッツでさえ、一般に評価されているのは中国哲学に強く影響を受けているとされる彼の政治思想ではなく、主に汎神論的な世界観を体現した『モノドロギー』(1714)であり、二進法に関する数学的知見であり、またそこにおいても中国思想の影響を見る説得的な論究は未だない。ここでヨーロッパ思想と中国古典思想の接点をもう一度探る必要がある。

近年、中国明朝末から清朝初期にかけて布教活動を展開したイエズス会の宣教師による所謂「中国報告」の研究とその受容史の研究が再び盛んになると、その発展研究としてライプニッツ、ボルフによる中国思想の受容に俄に焦点が当てられるようになってきた。更にヴォルフ研究ではその中国思想に強い影響を受けた道徳論が間接的にカントの道徳哲学に影響を与えたのではないかという魅力的な推測が一度ならず取り上げられた。その解明へ先鞭をつける論究が上掲した三氏の野心的な試みなのである⁹⁾。彼らはマルコポーロにまで遡る旅行者の手記・報告文から始め、無名の宣教師たちの報告文・著書を丁寧に読み解きながら、西洋思想における儒教思想の影響を跡づけを試みている。特に堀池氏の研究はその対象が広範で示唆に富んでいる。それによって宣教師たちの中国文化・思想との出会いの様子が明らかになりつつある。また、石川氏のカントの蓋然性の論理に中国思想の影響を探ろうとした視点は独創的で今までになかったカント初期哲学研究に新たな切り口を見せている。

しかるに、筆者は彼らの試みは未だその目論見を完全には達成出来てはいないのではないかと考えている。カント思想の核心に切迫せんとする彼らの篤い熱意にもかかわらず、残念なことにカントの峻厳な敬虔主義的な道徳論の中に儒教思想を探し出し得たとは言い難いと思われる。比喩的な表現で申し訳ないが、事の核心は喉元にまで迫っているが、核心そのものまで射止めるに至ってはいないと筆者は考える。また、論理学上の新たな思考法、世界

把握の方法としてビュルフィンガーとカントによって新たに提示されたとされる「蓋然性」の論理による哲学展開もカントの独創と考えるには無理があるのではないかと考える。

本論は三氏の論考を各個に吟味しながら、彼らの思惑がどのようにその目論みから外れ、また外れていると言わざるを得ないのか、出来るだけ簡明に論じるつもりである。実は筆者はもしカント思想に中国哲学の影響が見い出せれば、それはとても素晴らしいことだと思っている。仮にそれが示されれば、理性（Vernunft）と統覚（Apperzeption）の機能とその扱いを中心としたカントの難解・晦渋な理論展開や『純粹理性批判』の論理展開から飛躍・乖離しているように思われる実践理性理論が思いのほか容易に理解できるかもしれない。古代ギリシア・ローマの哲学から中世キリスト教哲学を経て、近世・近代の意識哲学、実存哲学と辿り、ほとんど独壇場の歴史展開を示しているヨーロッパ哲学に、それは「ヨーロッパ哲学にあらずば哲学にあらず」といった矜持の様相を呈しているが、その強固な巖に楔を打ち込むことが出来る。そのように彼らの議論に反論する筆者の試みが成功することがあれば、それは内心、筆者にとって必ずしも喜ばしいことではないが、一方でまた「カントにおける中国思想」というテーマがヨーロッパの哲学史においてあまりにも遠大であり、それに意識主義から脱する努力の過程である現代哲学の諸分派にとっても衝撃的であるので、もしそれを前提としたカント論が誕生すればその後のロマン派哲学、いや、その後の実存論的哲学もかなりの部分を書き直さなければならぬだろう。また、デカルト・カント以後の近代意識主義を修正・否定する現代哲学も、ヨーロッパにあっては同じ意識主義からの試み、作為と見られるのでカントにおける中国哲学影響云々の問題はヨーロッパ近代哲学全体の問題を孕んでいると言わなければならない。これはすこぶる重大な事案なのである。それゆえ、まずはヨーロッパ思想における中国古代思想影響論の展開にいたる歴史的経緯を少し丁寧に辿ってみる必要がある。

1. 中国哲学の発見

マテオ・リッチ (1552-1610)、アダム・シャル (1591-1666) をはじめとするイエズス会の宣教師たちがもたらした中国の文物と政治制度の報告によって、ヴォルテール (1694-1778) やライプニッツは近代のヨーロッパどこか、その基礎であり、かつ輝かしい伝統をもつ古代ギリシア・ローマの絶対的な価値に対抗しうる文明と思想が地球の裏側にあるのではないかという憶測を持ち、それが特にヴォルテールの著作を通して一部知識階層の間で広まった。中でも『論語 (為政編)』、『孟子』、『中庸』に展開されている聖人としての君主の施政のあり方を説いた未だヨーロッパ人の知らない君主論に彼らは衝撃をうけた。それはつまり、家庭において夫であり、父親である主人が家族の全ての構成員を慈しみ、指導する家長としてその徳を示さねばならないように、国の頂点にある君主も家長が家族に対するようにその臣民を慈しみをもってあたらねばならない。そのようにして君主は国の家長としての徳の模範を示さねばならないとする。ライプニッツは、宣教師たちの報告と彼らの著書を通して、ヴォルフはライプニッツを通してそういった中国哲学の政治倫理思想に深い感銘をうけたのである²⁾。

折しも当時のヨーロッパは、トマス・ホップズ (1588-1679) の『リヴァイアサン』 (1651) で展開された、ローマ・カトリックから独立した世俗君主の絶対的権利を擁護する思想が広く宮廷人の間で流布し始めていたからである。ホップズの思想はローマ・カトリックの信仰に根ざした教会という精神的な、同時に世俗的な権威に対して、君主という唯一世俗的な権威が対抗すべく君主側にも精神的な力としての神の栄光を与えたものである (絶対王制論)。こういった当時の時代に即した、かつ王権側に都合のよい権威づけの理論は、フランス・ブルボン王家をはじめ多くの君主勢力によって両手で受け入れられ、実質的にはかなり進んでいた王公勢力による世俗支配をより確かなものとする手段とされた。そういう時代背景の中で宣教師たちの報告文・書簡はいわゆる彼らのイデオロギーを支える絶好の材料となったはずで

ある。

そもそも、近代ヨーロッパにおける中国文明との出会いは、13世紀のマルコ・ポーロの東方大旅行に始まるのだが、その出会いは長い間「はるか東洋の夢の国」の域をでなかった。直接的な出会いは、15世紀のコロンブスらによるアメリカ大陸や東洋への一連の冒険旅行の動きと、ルターによる宗教改革に端を発したイエズス会による一大布教活動の時代まで待たなくてはならなかった。イエズス会は、ルター、カルヴァン、メラニヒトンらが主導した宗教改革によるヨーロッパでの失地を挽回すべく、またその背景としての政治的な野望を担いながら東洋や南アメリカ大陸へと向かった。しかし、彼らが中国で見たものは、南アメリカのような一見、野蛮な未開地ではなく、良く整備された官僚制度を伴った高度な政治制度と支配体制を敷いた一大帝国であった。広大で溢れんばかりの人口を擁した街々と東洋的な独自さに彩られているが、決してヨーロッパにも劣っていない文物に彼らは目を奪われた。勿論、彼らが持ち込んだ天球儀や砲術をもって示したヨーロッパのルネサンス以来の輝かしい天文学、数学、それらを応用した諸科学の成果には中国人をして顔色なからしめるものがあったが、それでも、宣教師たちの目には、この東洋の帝国の文明度・民度・政治制度はととても高度なものだったので、彼らは布教活動にあたってその手法・教義に至るまで中国のしきたりや思想に合わせざるを得なかった。それは後に、バチカンとイエズス会内部で「典礼問題」⁹⁾をひきおこす。マテオリッチ、アダム・シャルルなどは中国文化に自らの生活様式を合わせ、キリスト教布教にあたってその理念・語彙を中国流に修正してより柔軟な態度をもって布教活動に従事した。そういった柔軟さがバチカン側に疑義をまねき、諸会派内で宗教的な問題をひきおこした。

2. 宣教師たちの報告のライプニッツ・ヴォルフの思想への影響

マルコポーロの『東方見聞録』以来、多くのヨーロッパ人が中国の文物や風俗の報告文を本国へ送っているが、彼らは布教活動を通して中国の文物に関する知識や儒教思想、その理念は彼らにとって曖昧模糊として、それゆえ難解なものであったが、それらを本国・バチカンへと報告し、それに解説を付した。中でも顕著な影響を持つものは17世紀に入って公にされたプロスペロ・イントルチェッタ（1625-96、『中庸』の翻訳）やフィリップ・クープレ（Phillipe Couplet, 1624-92、『シナの哲学者 孔子』*Confucius Sinarum Philosophus*, 1687）、ブーヴェ（Joachim Bouvet, 1656-1730、『シナ皇帝の歴史的肖像画』, *Portrait historique de l'Empereur de la Chine*, 1697）、フランソワ・ノエル（Nôël, 『中華古典の六古典』, 1712, 『中国哲学三論』1712）及びクープレの著書をもとに『古代中国道徳・政治学』を著したビュルフィンガー（Georg Bernhard Bülfinger, 1693-1750）であった。そのなかでもクープレの著作はフランスをはじめヨーロッパの多くの知識人に読まれたようで、ビュルフィンガーやヴォルフだけでなくカントやヘルダーもその読者であった⁴⁾。クープレ、ビュルフィンガーの著作における中国哲学における非宗教性・高度な倫理性の指摘は読者たちを驚かせ、その思想に多大な影響を与えたと推測される。本論ではビュルフィンガーがヴォルフ、カントに与えた影響がいかなるものであったか、というのが当面の問題である。特にカントにおけるビュルフィンガーの影響、ひいてはカント哲学における中国思想の影響の有りや無しについて探るのが本論の究極的な課題である。以下、三氏の主張を個別に論じる。

3. 「カントにおける中国思想」①

石川文康氏は長年のカント研究の中で、カントがヨーロッパ哲学・論理学の伝統である「排中律」⁵⁾を克服して第三の思考方法たる「蓋然性の論理」を

自己の哲学の中心に打ち立て、その「公平・中立な」立場、つまり「批判」の視点から彼の中心的な哲学「純粹理性批判」、「実践理性批判」、「判断力批判」を展開したと指摘した。石川氏はその中でヴォルフは講演録『中国人の実践哲学』（“Rede über die praktische philosophie der Chinesen”, 1721）において儒教の倫理・道徳論から援用した「自由意志の下における善行」を彼の代数学・幾何学が示し、またそれに求められる完全性をあらゆる学問・思考形式の規範として思想展開をはかる完全性の理論（Vollkommenheit）から導出したとした。それは石川氏によれば、哲学者カントがよって立つケーニヒスベルグの知的環境としてのヴォルフ哲学とアリストテレス主義が、彼の哲学的傾向・思考形式にとって見逃すことのできない絶対的の要件に由来するとした。そして、蓋然性の論理こそ孔子が示した中庸の思想＝中間項の思考方法であり、カントの批判哲学がその中心理念とした蓋然性の論理だとし、それはまたドイツ啓蒙主義、ひいてはヨーロッパ近代思想に決定的な影響を与えたとした。氏は「ドイツ啓蒙主義が陰に陽に中国哲学に反応していた」と結論づけた。その際、石川氏は弱冠二十二歳の青年カントは、ビュルフィンガーの蓋然性の論理を引き合いに出すことによって「自ら知らずに」間接的に「中庸」の思想に依拠していたとも付け加えている。

4. 「カントにおける中国思想」②

井川義次氏はヴォルフの弟子とされるベルンハルト・ビュルフィンガーの著作『古代中国人の道徳・政治学説の実例』（specimen doktorinae vererum Sinarum moralis et politime, 1724）にみられる思想に着目して、カントの初期論文『活力測定考』に展開される方法論がビュルフィンガーの論理「中間項」の視点に通じると見た。「中間項」の視点とは前出の石川氏の言うところの「蓋然性」の論理の謂いである。事実、カントは「活力測定法」の冒頭で「ビュルフィンガーがパテルスブルグ・アカデミーに寄稿した論文には真理の探究にあたって私がつねづね用いている一つの準則が見られる」と言及

している。石川氏が、カントがビュルフィンガーの手法を「抛りどころ」としたと解釈したのを受けて、井川氏もシェーンフェルドの同じ主旨を扱った著書を紹介しながらカントが蓋然性の論理をビュルフィンガーから受けつだと推論するのである。その上で井川氏はヨーロッパにおける中国思想の受容史をたどりながら、石川氏の「カントが蓋然性の論理のヒントをビュルフィンガーから受けつだ」という主張を該当する中国古典文献の考証によって補強している。

5. 「カントと中国哲学」③

堀池氏はその浩瀚な研究書『中国哲学とヨーロッパの哲学者』においてヨーロッパ人による中国事情・文物の知識開拓の歴史を詳らかにするにあたって、ロジャー・ベーコン（1214-94）からマテオ・リッチ、ニコロ・ロンゴバルディ（1559-1654）、クープレ、イントルチェッタなどのイエズス会宣教師たちの著作・報告文を跋渉し、彼らの中国との関与の在り方、彼らの中国思想の理解を跡づけた。さらには、パスカル（1623-62）、アントワヌ・アルノー（1612-94）、ライプニッツ、ヴォルテール、デカルト（1596-1650）といった17世紀の傑出した哲学者たちに刻印された中国古代思想にも論究した。近代に至っては、カント、ヘーゲル（1770-1831）、マックス・ウェーバー（1864-1920）、グスタフ・ユング（1875-1961）、ヤスパース（1883-1969）といった歴史に大きな足跡を残したドイツ人哲学者たちにも中国思想の痕跡を探った。その取り扱った範囲は広大であり、その問題とする資料は膨大である。

ここでは「カントにおける中国思想の影響」が目下の緊急な問題なのでその点に焦点を当てる。堀池氏によれば、カントは大学研究者として駆け出しの頃、「自然地理学」という講義を受けもっていた。その講義では中国事情が多く扱われていたということである。彼の知識はすこぶる博く、中国の習俗・産業・本草学から民衆の民度・宗教に至るまで取り扱い、多くの聴講者

を楽しませていたようである。しかしカントの中国に対する知的姿勢は、あくまで講義の為の中国学に関与する程度のものであり、その知的財がヴォルフのように思想の核にまで影響を及ぼさなかった。それでは、ヴォルフを通して間接的にもカントが中国思想に影響を受けたという可能性はどうだろうか。堀池氏は「若きカントの中国知識」の章の末尾でカントはその初期哲学構築においてヴォルフに大きな影響を受けたという。しかし前掲の二氏とカント観を共有するものの、「(中国の) 精神的な領域に対してネガティブな見方が多く、それゆえそれが彼自身の根本的な思索に何らかの影響を与えていたとは考えにくいものであった」⁹⁾と、カント哲学における中国思想の影響をきっぱりと否定している。筆者の私見ではあるが、堀池氏は「カントへの中国思想影響論者」の中でも証拠資料に特に厳密なところがある。もちろん、学術研究にあたっては直観 (Anschauung) と思考の飛躍 (Sprung) は新たな研究の地平を展く基礎 (Grund) である。しかし、氏の論考はその中でもいささか慎重であり、厳密であり、精確さを感じさせるのである。

6. 「カントにおける中国思想」批判 — 結論にかえて —

井川氏は、カントの「蓋然性の論理」におけるビュルフィンガーの影響を石川氏が指摘したことを高く評価し、「カントにおける中国思想の影響」という持論を展開するにあたって、氏の論考を同じく中国思想影響説を唱えるシェーンフェルドの主張とともにその有力な根拠とした。そしてその影響はライプニッツ、ヴォルフ、カントを通してドイツ啓蒙主義、ひいてはカント後のヨーロッパ哲学界に深い影響を残したとした。なるほど、ライプニッツ、ヴォルフの思想における中国儒教思想の影響は見逃せないものがある。とくに中国思想におけるヨーロッパから見た「非宗教性」、「理念としての君主の庶民一般に対する一種父性的な役割」に関する思想はライプニッツ、ヴォルテール、ヴォルフを通して啓蒙君主王フリードリヒ二世の治政にも影響を与えたとも指摘されている。

しかるにここで著者は主に石川氏、井川氏が唱える「カントにおける中国思想の影響」についてそこに潜在する四点の問題点を指摘したい。

一つは、石川氏が主張するところの、カントがその大学卒業論文「活力測定考」(Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte, 1747)においてビュルフィンガーの「蓋然性の論理」に思想構築のヒントを得、自己のものとしたという経緯である。「蓋然性の論理」とは、つまり、論理学上に一つの命題(A)があり、そしてもう一つ前者とまったく正反対の論理的主張をもった命題(B)があるとする。その対立状況の解決策として、それまでの論理学では二つの対立的論題のどちらか一つを「正」の命題として取り上げ、他方を「否—正」として切捨てなければならない(排中律)。「蓋然性の論理」とは片方の論理をそのように取捨するのではなく、双方の内容を汲み取った「中間項」を積極的に構想・評価しようという論理構築上のスタンスである。石川氏の主張はそれまでのヨーロッパ思想界において、テーゼ間の絶対的対立を克服し、世界把握のあり方・思想形成にかかってない柔軟性をあたえるものこそ中国古代の「中庸」の思想に由来するものであるという主張であった。しかるに「活力測定考」はその論を冷静にたどれば純粋に幾何学上の二辺の合力と分力そして、その処理のし方を問題としたものであり、それ以外の何ものでもない。そのなかでビュルフィンガーの主張との論争が展開され、力の分方・分化の理論に異議が唱えられている。つまり、石川氏の主張はカントの論点とは異なる。

二点目は、石川氏はカントが「蓋然性の論理」を中国思想に深く心酔したビュルフィンガーから直接取得したと主張しているが、この論理は実はデカルト、ライプニッツの純粋な数理的理論から始まり、論理の問題としてはイギリス経験論が深く手を染めている⁷⁾。特にヒュームは科学においても数学のような確実性はないが、蓋然性の高度な有用性を認めている⁸⁾。不幸にして筆者は未だビュルフィンガーの著作を直接知る機会を得ていないが、カントがその独自の「蓋然性の論理」を構築するにあたって、たとえ二十二才の

研究者として駆け出しの時期にあったとしても、ビュルフィンガーも含めてもっと大きな時代の思想的潮流に乗っていた可能性は十分に残されている。

第三点として、井川氏の主張についてである。氏は論考『青年カントと中国哲学』においてカントの「活力測定法」の論理展開の形式とビュルフィンガーの観点が軌を一にしていると指摘している。その根拠として石川氏の論の典拠としたものと同一箇所を援用している。同じものをまた引用して恐縮であるが、つまり、

ビュルフィンガー氏がペテルスブルク・アカデミーに寄稿した論文には、真理の探究にあたって私がつねづね用いているひとつの準則が見られる。賢慮を持つ人々が、ともに相手の意図を推察出来ないでいるかあるいは両方の意図を推察できていて、しかも相反する見解を主張している場合には、たいていの場合、両派にある程度認められているような何らかの中間的命題に注意を向けることが、確率的にも理にかなったものなのである⁹⁾。

井川氏はカントの問題となるこの記述と後に続くカントの論説の内容を踏まえながら、こうつけ加えている。

叙述を見る限り、これらは純粋に物理学的な論説に留まるように見える。しかしながらこうした記述は確かにカント哲学—ひいてはそれ以降のヨーロッパ哲学の根底に関わるものであり¹⁰⁾、

と指摘し、井川氏はその根拠の提示として、もしくは氏の論の補強としてアメリカ人カント研究者シェーンフェルドの言説を紹介している。

シェーンフェルドはビュルフィンガーの論考「運動中の物体の力とその測定に関して」の中で提示されている「反対の調和の思想」、「力学的な調和」、「相互作用」、「活力」等の観念がカント哲学に流入し、晩期の思想まで展開

していったと見ているが、彼はこうしたビュルフィンガーの概念の出所を中国哲学であると扱っている。

また井川氏はやや中立的な、一見、批判的であるとも思えなくもないニュアンスであるが、

「老子とカントは同じ思想を共有する」¹¹⁾

とシェーンフェルドの言葉を引用している。この言葉が引用された意図がどこにあるのか筆者は想像できないが、この言葉を見て筆者は李白の詩「白髮三千暈…」を想起してしまう。また、シェーンフェルドの著作からの引用の箇所が井川氏の論文には記載されていないので筆者は不明にも確認することが出来ていない。また、井川氏は石川氏の論考『ドイツ啓蒙の異世界理解』の論旨を要約して

石川氏もこうした中間、あるいは、「真理の度合い」を問題にするビュルフィンガーに「中庸」の論理が流入する可能性があったと論述している¹²⁾。

と指摘している。

これはおそらく石川氏の

カントはビュルフィンガーの定式を引き合いに出すことによって、自ら知らずして間接的に『中庸』の思想に依拠していたとあってよいであろう。「依拠」という表現に語弊があるとすれば、「一致」と言い換えてよいであろう。

という言葉辞を踏まえて論述であろう。論旨は、カントの青年時代、論理学・哲学の世界では「中間」、「中間項」という用語が用いられていない、つまり概念として流布していない。それをカントが使ったというのは、彼がビュル

フィンガーに無意識に影響されたことによる。ここで「中庸」の論理 → ビュルフィンガー → カント という思想的継承の図式が出来上がるのである。しかし、やはり気になるのは「蓋然性の論理」に関する議論の歴史的経緯があまり語られていないことである。最近は同じようにライプニッツからヴォルフ、ラインハルト、カントに至る「蓋然性の論理」を詳しく検証している研究もある。石川氏においては主にビュルフィンガーと「中庸」との関係に焦点を当てられて語られているが、井川氏はその点に関しては石川氏の論述内容に多く依存しているように筆者には思われる。また、カントについて語る時、どういうテーマであっても特に先行するイギリス経験論内における問題に関してある程度詳しく論究する必要があるだろう。ロック、バークレリー、スミス、ヒュームの議論にも触れておくべきでなかったのか。またヴォルフ、クルージュス、及びカントによる蓋然性概念議論との関与のいきさつに関してはより詳しく論述されるべきではなかったか。それによって単に論理学上のものとしてのみ扱われていない歴史上の経緯が明らかになってくるだろう。

最後に、今までヴォルフ、ビュルフィンガー、カントにおける「蓋然性の論理」、中庸の思想の展開を辿ってきたが、問題としてより重要と思われるのはむしろ、中国思想がライプニッツ・ヴォルフの政治思想に多大な影響を与えた「道徳論」、特に「為政者の道徳論」のほうではなかったのではなかろうか。理神論とその延長上にある道徳論はイギリス経験主義哲学において焦眉の問題であり、ロック、シャフツベリー、バークリ、アダム・スミス、ヒュームの間で多くの議論が闘われえてきた。大陸にあるヴォルフ、カントも当然、その渦中にあり、人間の感覚による世界把握の様相を新たな原子論的な論理展開で明らかにしたイギリス経験論の議論に形而上学的基礎を与えようとしたのがカントの『実践理性批判』であり、『道徳形而上学』であるのは周知のとおりである。中国の徳政思想に感銘を受けたのはイエズス会の宣教師だけでなく、彼らの著書や報告文に触れたヴォルテールやライプニツ

ツ、ヴォルフなど多くの知識人・哲学者がいる。17世紀から18世紀にかけてヨーロッパ思想界で認識論とともに多くの思想家の議論の対象となっていたのが道徳論であった。それに形而上学的基礎づけをしたカントにおいてこそ古代中国思想の影響があったのか、それとも無かったのか、また、あればそれはどの程度、どの段階であったのかを検証する方向性こそカント哲学に関する研究・論争に相応しい視点であると筆者には思われる。筆者はもともと哲学プロパーの研究者ではなく、それゆえ専門家の見解にももの申すには少々気が引ける思いがするが、「カントと中国哲学」やそれに類したタイトルは、それだけで一般識者のみならず、関連の研究者にも大きな驚き、衝撃を与えるように思えてならない。それそのものをねらった論考もあるかもしれないが、勿論、カントの問題はカントだけの問題にとどまるものではない。井川氏自身述べているようにヨーロッパ近代・現代思想の解釈、受容のし方にも大きな影響をもたらすことを考慮にいれて欲しい。ましてや井川氏が紹介したシェーンフェルドの言説—「老子とカントは同じ思想を共有する」—に至っては読者をして論考の先を読み進める気力を喪失させてしまう危険性がある。

参考文献

- Immanuel Kant : *Kant's gesammte Schriften Band 1 Kant's Werke Vorkritische Schriften*
 Julia Ching, Willard G. Oxtoby : *Moral Enlightenment - Leibnitz and Wolf on China -*, Steyler Verlag, Sankt Augustin 1992
- Mungello Leibnitz and Confucianims : *The Serach for Accord* The university press of Hawaii Honolulu 1977
- Martin Schönfeld : *The Philosophy of the young Kant* Oxford University Press 2000.
- Christian Wolff : *Grundsätze des Natur- und Völckerrechts Halle 1754.*(Christian Wolff のインターネット上のサイトから原文をダウンロードした。)
- イマヌエル・カント『カント全集 I』(前批判期論集 I) 大橋容一郎・松山壽一 訳 岩波書店 2000年
- イマヌエル・カント『カント全集』(書簡集)
- ヴォルテール : ヴォルテール書簡集 (1704-1778) 高橋光安編訳 法政大学出版局 2008年
- ロック、ヒューム『世界の名著 27』大槻春彦他訳 中央公論社 1968年

- ヴォルテール、デイドロ、ダランベール『世界の名著 29』 中川信他訳 中央公論社 1970 年
 五来欣造『儒教の独逸政治思想に及ぼせる影響』 早稲田大学出版部 1929 年
 堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』 上下 明治書院 2002 年
 石川文康『カント 第三の思考』 名古屋大学出版会 1996 年
 石川文康「ドイツ啓蒙の異世界理解 — 特にヴォルフの中国哲学理解とカントの場合 —
 ヨーロッパの認知カテゴリーの挑戦 —」『「一つの世界」の成立とその条件』所収 国
 際高等研究所 2007 年
 石川文康「排中律を超えて ドイツ古典哲学と中国哲学の間」『知のユーラシア 1 知は
 東から 西洋近代哲学とアジア』(15 頁 - 36 頁) 所収 明治書院 2013 年
 井川義次 同上 39 頁 - 65 頁
 井川義次「青年カントと中国哲学 — ビュルフィンガーの中国哲学観を背景として —」
 『哲学・思想論集第三十七号』所収 筑波大学 2012 年
 高柳俊一〈書評〉「ライプニッツと儒学」「ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研
 究、29(2)」所収 上智大学 1980 年
 井上克人 エッセイ「ドイツ啓蒙時代における中国学」 関西大学 2010 年
 渋谷繁明「ヴォルフにおける数学的方法論再考」 駒澤大学「文化」第 32 号 2014 年
 長網啓典「蓋然性の論理学 — ライプニッツ中国学の方法論への一視点 —」 東洋文化研究
 16 号 135 頁 - 157 頁 学習院大学 2014 年
 手代木陽『ドイツ啓蒙主義哲学研究 — 「蓋然性」概念を中心として —』 ナカニシヤ出版
 2013 年

注

- 1) 参考文献を参照されたし。堀池信夫、石川文康、井川義次 三氏の一連の著書、論考を指す。
- 2) Vgl. Julia Ching, Willard G. Oxtoby: S.147-S.186. *Christian Wolff Discourse on the Practical Philosophy on the Chinese, 1726.*
- 3) マテオ・リッチをはじめとするイエズス会士らは、中国でキリスト教を布教するにあたって現地の文化・習俗を尊重し、中国人が習わしとしていた道教・儒教に関する諸儀式を宗教的なものと見做さないことによってキリスト教入信の障壁を取り払った。しかし、後に中国での布教活動に参入したドミニコ派・フランチェスコ派はイエズス会士たちの手法を批判し、キリスト教に入信した中国人が中国独自の典礼行為に参加することを全面的に禁止した。このことは当時の清政府の不興を買い、政府によるキリスト教の布教禁止問題へと発展していった。後、この典礼問題はバチカンにも持ち込まれ、イエズス会の手法はバチカンで正式に禁止されることとなる。
- 4) 堀池信夫『中国思想とヨーロッパの哲学者 下』 527-555 頁 - 石川文康「ドイツ啓蒙の異世界理解」 56 頁 - 井川義次「西洋近代哲学の形成と中国哲学」 73-89 頁を参照。

- 5) 本稿第六章参照。
- 6) 堀池信夫『中国思想とヨーロッパの哲学者 下』542頁。
- 7) 手代木陽『ドイツ啓蒙主義哲学研究』3-9頁。
- 8) ヒューム『人性論』427-431頁：in『世界の名著 27 ロック・ヒューム』
- 9) 『カント全集 I』39頁。
- 10) 井川義次「青年カントと中国哲学」4頁。
- 11) 井川義次 同上。
- 12) 井川義次 同上。